

A. Huxley と女性

——諷刺作品の場合——

桑 原 加 代 子

Aldous Huxley の大部分の作品に絶えず諷刺の風が吹いているというのは、周知のことである。彼はその本領とも言える諷刺作品において、登場人物の行動、言葉、物の考え方を冷静にみつめ、それらを通して人間のもっている弱点、愚かさ、社会問題等を皮肉なタッチで、または、ユーモアにあふれた文体で、またある時は、残酷とも言える描写を織りまぜながら、鋭く指摘している。彼の諷刺の犠牲者はあらゆる階級の男女、子供たちと実に幅広く、大部分はかなり辛辣な調子で攻撃されている。ところが、その辛辣な諷刺の筆から免れているものや、その鋭い調子が幾分やわらげられているものが若干いる事は否定できない。Huxley 前期の代表作 *Point Counter Point* を例にとってみると、彼はこの作品の中で数多くの男女を登場させ皮肉な状況下に置き、彼独得の冷酷とも言える観察眼で眺め、その登場人物の様々な弱点を暴露している。ところが興味深いことは、Mark Rampion という男だけは唯一健全で理想的な人物として扱われ、Huxley の諷刺の矢を受けていないことである。この事は多くの批評家の認めるところである。⁽¹⁾ また、同じく諷刺作品 *Brave New World* において、読者は Huxley が John という男を滑稽に描いてはいるものの終始一貫して諷刺的にしていないことに気が付くのである。では、Huxley の攻撃を受けていない人物、あるいは諷刺が弱まっている人物とは一体どういう人たちであろうか。また反対に、その風当りの最も強いのはどのような人たちであろうか。前述の M. Rampion, John は、いずれも男性である。女性の方はどうなっているのか。Rampion, John のように扱われている人物が女性登場人物の中にいるだろうか。Huxley の作品は、初期のもの程諷刺色が濃くその皮肉と諧謔は冴えていると言われている。この事を考慮して、本稿では、*Crome Yellow* (1921), “*The Gioconda Smile*” (1922), *Point Counter Point* (1928) そして、年代的には *Point Counter Point* の数年後の発表で、正確に言えば前期のものとは言えないが、現代文明に対する痛烈な諷刺と評価の高い *Brave New World* (1932) を取り上げ、これらの諷刺作品において女性がどのように扱われ描かれているかを、男性と対比させながら検討し、作品全体にどのような影響をもたらしているかを分析していくことにする。

最初に取り上げるのは、1922年 Huxley が始めて世に問うた長編小説 *Crome Yellow* から Henry Wimbush 氏語るところのラピス家の三人姉妹にまつわる episode である。これは、*Crome Yellow* の本筋とは直接関係はないが、Huxley の諷刺の牙が輝り独立した短編としても十分通用するものである。George という22才の青年を軸に1833年当時の貴族の3人娘とその母親の生活ぶりが、皮肉にしかもユーモラスに描かれている。

まず、Huxley は貴族の3人姉妹の精神主義を紹介している。長女 Georgiana、双子の Emmeline, Caroline の三人は、食事をする事は“coarse”, “unspiritual”(C-Y, p. 87)⁽²⁾な事だと考え、食物の事が話題になると途端に元気がなくなるのである。食物を前にした時の彼女たちの反応を Huxley は、次のように観察している。

They waved away whatever was offered them with an expression of delicate disgust, shutting their eyes and averting their faces from the proffered dish, as though the lemon sole, the duck, the loin of veal, the trifle, were objects revolting to the sight and smell. (C-Y, p. 87)

また、“transcendental”(C-Y, p. 87)という言葉を受している Georgiana のお気に入りの会話は例えば、“The wish of two people who truly love one another is not to live together but to die together”(C-Y, p. 88)といった類のものである。Huxley は彼女たちが、物質的、肉体的なものを極力排除しようとしている事を読者に印象づけている。

三人姉妹の行動・物の考え方を披露しながら皮肉屋 Huxley の眼は、彼女たちの背後に隠されているものをしっかりとらえている。“Luckily a very little suffice to keep one alive”(C-Y, p. 87)と言っている Georgiana や二人の妹たちが不思議なことに“extraordinary healthy”(C-Y, p. 87)であると描写されている点に注目する必要がある。三人は、食べることは下品であり、たとえ食べてもほんの少量で十分であると言い何かといえば、すぐ失神(C-Y, p. 87)し、いつも元気なさそうにしているが、George という青年の目には彼女たち三人は非常に健康にみえるのである。これはごく当り前の事である。真実を知っている読者は Huxley の辛口の皮肉のきいた箇所である事に気付くはずである。このように、Huxley は三人娘の言葉と実際の態度との間に違いがある事を見逃してはいないのである。

さらに結末に至って、彼の細い観察眼と皮肉な筆使いは一層牙えをみせている。即ち、彼女たちの精神主義が偽りのものである事を、見事な対比でスッパ抜いているのである。

偶然見つけた秘密のドアの向こう側で George の見たもの、それは大きな口をあけての三者三様の食事風景であった。Georgiana は、右手の親指と人差し指の間に “a drumstick of the dismembered chicken”(C-Y, p. 91)を持ち、Caroline はナイフとフォークをしっかりと握りしめ、Emmiline は赤ワインのグラスを手をしているという有様である。その上彼女たちの前には、“The carcass of a cold chicken, a bowl of fruit, a great ham . . . the brown cannon ball of a cold plum-pudding, a decanter of claret”(C-Y, p. 90) といったものがずらりと所狭しと並べられているのである。この引用から、彼女たちがすでに何がしかのものを食べさらにこれから大量のものを食べる場所である事は容易に判断できる。ここで読者は、三人娘が存在しないも同然といった食欲しか持ち合わせていなかった事を思い出すであろう。Huxley は Emmiline のある時の食事の内容 “Two spoonful of soup, a morsel of fish, no bird, no meat, and three grapes”(C-Y, p. 87) と記し、Georgiana に関しては “an olive, two or three salted almond and a half a peach”(C-Y, p. 88) を食べたに過ぎないと描写している。この二つの細かい対比によって、彼女たちの大食ぶりが一層際立ち、行動と言葉のアンバランスが示されている。

Huxley にとって女性の外見的な美しさは諷刺の下準備になっている。三人娘の容姿について、Huxley はそれぞれ次のように描いている。

. . . Georgiana, the eldest, with her black ringlets, her flashing eyes, her noble aquiline profile, her swamlike neck, and sloping shoulders, was orientally dazzling; and the twins, with their delicately turned-up noses, their blue eyes, and chestnuts hair, were an identical pair of ravishingly English charmers. (C-Y, p. 86)

これは彼女たちの美しさを強調するためではなくむしろその逆の効果を生んでいると言える。秘密の部屋で大きな口をあけ、手に食べかけのチキンを持っていたのは他ならぬこの彼女たち三人である。美人でチャーミングな若い女性三人がそろってあぐりと口をあけ食事をしている光景は、美的とはいえずむしろ滑稽でユーモラスであろう。男性や子供あるいは老人がバクついていよりも、いつも青白い顔をして「死」「精神」といった言葉を好んで使っている美しい女性が、誰も見ていないであろう所で大口をあけて必死になって食物をほおばっている姿の方がはるかに、愉快で痛快である。このように Huxley の彼女たちの美しさの描写は、結末のなんとも言えないおかしさを引き起こす役目をしているのである。

三人姉妹の母親 Lady Lapith に対しても、Huxley はその虚栄心にチクリとくぎを刺している。彼女は George に会った時、彼の財産、家族の状態がかなり良いという事を

知って、初めて彼を自分たちの仲間として受け入れるといった、形式、家柄を重んじるタイプの女性である。また、貴族と娘たちを結婚させようと考えていた彼女は、George を好ましいと認めながらも “an excellent second string for one of the twins” (C-Y, p. 87) としてしか見ていなかったのである。要するに George は、長女の結婚相手ではなくその下の妹たちの相手であり、さらにその妹たちにとっても花婿第一候補者ではないのである。ところが、その George が三人娘の真実の食事の現場を押えた結果、Georgiana との結婚にこぎつけた時 Lady Lapith は、貴族に娘を嫁がせるという夢を断念せねばならなかったのである。“Lady Lapith was disappointed, of course; she had hoped for better things—for Timpany and a coronet” (C-Y, p. 91). 伯爵夫人の地位と宝冠の夢が壊れ、せいぜい second best と考えていた男に娘を奪われた Lady Lapith の姿に、読者は娘を玉の輿に乗せようとはり切っている母親に対する Huxley の諷刺の一吹きをみるのである。

ここで我々は、George が優しく思いやりのある青年として描かれている点に目を向ける必要がある。彼は “youthful and ingenuous mind” (C-Y p. 85) を持った22才の若者である。三人娘の食欲については驚くと同時に “solicitous distress” (C-Y, p. 87) を感じ “a continual agony” (C-Y, p. 88) に心を痛めている程である。彼は “if she died, then he would die too, he would go to seek her beyond the grave” (C-Y, p. 89) とまで思いつめているのである。だから、彼女たちの異様な食事の光景に遭遇した時 “There he halted, petrified by what he saw, mutely, gasping” (C-Y, p. 90) といった反応を示した事は当然であろう。そこには一途に Georgiana を思い心配し悩み、そして本当にびっくりしてしまったという純真で “pleasant, unpretentious, kindhearted” (C-Y, p. 87) な若者の姿があらわれている。好青年 George の姿が明確にされている。

三人娘についてのこの episode は、全体的にそれ程深刻ではなく、むしろ軽い筆致で運ばれているが、ついに馬脚をあらわした貴族の三人姉妹と夢をかない損ねた母親は共に Huxley の諷刺の風を受けている。それに比べて George は結末の部分で Georgiana を追いつめ結婚の承諾を迫ってはいるもののこれは George のずる賢さを示すものとは言い難いのである。Georgiana は、George のこの行為を “blackmail” (C-Y, p. 91) と文句を言っではいるが、彼は事前に彼女たちの偽りの食欲の事を知っていて入念に下工作をしてその後 Georgiana をおとし入れた訳ではなく、たまたま目撃したものを利用したにすぎないのである。それ故ずる賢さにはならないであろう。それよりもむしろ、完全に尻尾をつかまれた Georgiana が George に向って “You won’t tell anyone, George? Promise you won’t tell anyone” (C-Y, p. 91) と請願する場面は、バレちゃった、どうしよう困っている女性の姿がよく表われていておもわず笑いが出てくるのである。George の抜け目なさよりも、Georgiana の愚かさの方が強調されていると言えよう。あれ

程思いつめていた女性とめでたく結婚の運びとなった George と、口封じのため結婚しなければならない羽目に落ち込んだこの二人、George の方に軍配が上っているのは明らかである。彼女たちの死守していた過去の精神主義が、いかに愚かで滑稽であるかを Georgiana たち女性の姿を通して Huxley は示しているのである。

次に、Huxley 初期の特徴が顕著であると言われている“The Gioconda Smile”を取り上げる。この作品は1922年に発表され、その後脚色され舞台、映画化されている。“The Gioconda Smile”には、壮年の知的な男 Hutton を中心に彼の妻 Emily、愛人 Janet Spence、もう一人の愛人で彼の後妻になる Doris の三人の女性が登場する。ここでは Hutton をめぐる Emily, Janet, Doris の三人の女性を Huxley が、どのように扱っているかを探っていくことにする。

Hutton と Emily の夫婦に関して、Huxley は二人をほぼ平等に扱っている。まず Hutton にとって Emily は“unhealthy”⁽³⁾ (“G-S”, p. 146)で、始終愚知をこぼす、わずらわしい存在である事が明らかにされている。Emily が自分の病気の事について色々と話をしている最中、Hutton は別れてきたばかりの愛人 Doris との情事を思い出したり、Emily が『気分がすぐれない。今夜は家に居て』というのに対して、仕事だと嘘をついて Doris に会いに行くなどはその好例である。年齢と病気のため、かつての美しさがすっかり消えてしまった Emily は Hutton にとって、もはや何の魅力も感じない女性である。では、こんな Hutton を Emily はどう感じているのか。彼女は一見夫を頼っているように見えるが、実はわがままで気紛れである。主治医に勧められた転地療養などしたくないとか、同じく禁じられている食物を夫の忠告をよそに平気で口にしたりするのである。また、体の調子が良くないと言うものの客があったり、自分の好きなものを食べると “I feel so well today” (“G-S”, p. 148)と言う気分屋でもある。Huxley は、Hutton には妻をうとましく思っている夫の役を、Emily には夫をそれほど必要としない妻の役割を与え、それぞれの身勝手さを指摘し、その批難をどちらか一方に極端に傾けてはいないのである。ただ Huttonの口を通じての “... women with weak digestions ought not to marry ...” (“G-S”, p. 142)という言葉は、暗に病弱な Emily を否定している箇所として見逃せない点である。

Emily に比べて、Janet Spence は Huxley の攻撃を真正面から受けていると言える。Huxley は Janet が単純な snob である事を Hutton の目を通して暴露している。有名な画家の大作が何枚も飾られている Janet の居間で、その絵を見ながら Hutton は呟くのである。“Her real taste was illustrated in that water color by the pavement artist” ... (“G-S”, p. 140)。この Hutton の態度と言葉は、彼女が芸術または絵の真の良さ

など分からないくせに、有名人の有名な絵だという理由だけで、それら名画を飾り所有している事に満足している俗物である事を示している。人がほめ良いと認めるから、例えば一流の絵を自分のものにして自己満足しているというのは、実に単純であると言える。この単純さは、彼女の例の微笑にも表われている。Hutton は、Janet の微笑を、“Gioconda smile”(“G-S”, p. 14)と呼んでいる。これは “half-ironical flattery”(“G-S”, p. 141)から名付けたものだとして Hutton は告白しているが、彼女は真面目なほめ言葉と受けとり、その後 Hutton に会う時はいつでも、彼がうんざりしているにもかかわらず、その微笑を絶やさないようにしているのである。Hutton が半ば冗談で言ったことを本気にし時には彼が “old Gioconda”(“G-S”, p. 156)と呼んで嫌っているのに気付かない Janet の愚かな単純さを Huxley は Hutton の態度を通じて示していると言えよう。

Janet は、実に用意周到で抜け目のない女性である。彼女は Emily 殺害の準備として様々な事を行っている。第一に、Hutton の家を訪れた時 Emily の不平に夫 Hutton がほとんど耳を貸さないのとは対照的に、Emily の愚知にいやがりもせず熱心に耳を傾けている。“Miss Spence listened to her complaints about Llandrindod Wells, and was loud in sympathy, lavish with advise”(“G-S”, p. 147)。Janet の忠告、懇め、同情の後 Emily はすっかり明るく元気になっている。“Mrs. Hutton opened out, like a flower in the sun”(“G-S”, p. 148)。第二に Hutton が Emily の食物を制限しているのとは逆に、Janet は “Let the poor invalid have what she fancies; it will do her good”(“G-S”, p. 148)と言って Hutton をたしなめ Emily の食べたがっているものを食べさせようとしている。Emily は、これも Janet の優しさと受けとり大喜びするのである。第三に、砒素を入れて Emily を毒殺する時彼女のコーヒーの中に大さじ三杯もの砂糖を入れている。恐らく味または色をごまかすためであろうが、Emily は『シロップみたいに甘いわね。でも苦い薬のあとだから丁度いいわ』とこれまた Janet の好意と受けとり喜んでいる。このように Janet は Emily の病状に深く同情し、色々忠告し優しく振舞って自分を信用させようとしている。お蔭で前述のように Emily はすっかり Janet を信じ切ってしまったのである。Janet は計画を実行に移すまでは Hutton を慕っているという態度を表に決して出さず、Emily が自分に対して反感を抱かないように抜け目なく立ち振舞っている。

この Janet の抜け目なさは、Hutton に対しても遺憾なく発揮されている。Emily を見舞った後 Janet は Hutton と二人きりになると彼に向って確信に満ちた口調で “Your wife is dreadfully ill”(“G-S”, p. 150) という悲観的な言葉を発している。Hutton の取り越し苦労だとの言葉に対しては “I think poor Emily is in a very bad state” と反論し “anything might happen, at any moment”(“G-S”, p. 150) と二度も繰り返している。Emily の死があまりに突然であったと後で Hutton が疑問に思わないように、

また、万が一にも Hutton が、自分に疑惑の目を向けないように自分の目から見て病人はかなり弱っていて何時死んでもおかしくない状態だという事を印象づけているのである。殺害を計画しすでに実行に移した Janet にしてみれば Emily の死は時間の問題であるから、二度にわたるこの不気味な言葉は確信に近いものであるはずである。にもかかわらず、彼女は空々しくも心配しているかのように言っている。こんな Janet に対して Hutton は彼女の言葉の背後にあるものに全く気付かず、少しも心配する様子もなく、もう一人の愛人 Doris との約束で出かけていく。外出から帰ってきて妻の死を知らされた Hutton の耳に Janet のあの言葉 “anything might happen, at any moment” がうずまき、彼女の言った事は “extraordinarily right” (“G-S”, p. 151) であったと今さらのよう to 感心するのである。Emily をめぐる Hutton と Janet の会話は Hutton のまぬけさとうまくからみ合って、Janet の白々しいまでの抜け目のなさが如実にあらわれている所である。

Janet がずる賢い女性である事を示すと共に Huxley は彼女が反面愚かで傲慢である事を指摘している。彼女の愚かさ、傲慢さは Hutton が Janet をどう思っているかという事と、密接な関係があると考えられる。そこで Hutton にとって女性が、そして Janet がどのような存在であったかに注目する必要がある。彼は、妻や Doris に対しては “・ ・ ・ they were nothing more than what they seemed to be” (“G-S”, p. 148) と思っているのである。一方 Janet に関しては “・ ・ ・ there was something really rather enigmatic about her” とか “・ ・ ・ with Janet Spence it was somehow different” (“G-S”, p. 148) といった感じを受けているのである。即ち Hutton にとって Janet は Doris, Emily と比べてどこがどう違うと正確にはわからないものの何か釈然としないものをその回りに漂わせている文字通りの mysterious woman, “mysterious Gioconda” (“G-S”, p. 142) である。こんな Hutton に対して Janet は “I have understood you so well and for so long” とか “I could understand ・ ・ ・ I could guess” (“G-S”, p. 157) と自信満々である。読者は、ここに Janet の愚かなおごりをみるのである。なぜなら、Hutton は Emily の死後 Doris と再婚してしまったのである。Janet の『あなたの事は何でも分っているのよ云々』という言葉は、十分理解しているとばかり思っていた Hutton の本当の気持ちを見抜くことの出来なかった Janet の思い上りに対する Huxley の皮肉に溢れた諷刺であると言える。

さらに、Huxley の冷静な眼は Janet の執念深さ、嫉妬深さをとらえている。Hutton が Emily を失った後 Doris と再婚したことを知ってからの Janet の行動は実に興味深い。彼の妻になれると思って Emily を殺害したのに Hutton は一人になるとさっさと Doris と結婚してしまったのである。Doris との再婚によってもはや、Hutton の妻になれる可能性がなくなったと分った Janet は、それでも尚 Hutton に執着し彼に対する復

讐を開始している。即ち彼に妻殺しの検疑がかかるように工作し彼を窮地に追いこんでいる。鑑定人に対する答え、法廷での証人喚問等 Hutton に不利なように事を運んでいる。これは Janet の彼に対する怒りがいかに強いものかを的確に示している行為と言える。そして彼女は Doris に対しては嫉妬心を剥き出しにしている。Doris の事を “so low class, so little better than a prostitute” (“G-S”, p. 165) と批難し彼女に子供が出来た事を知ると “obscenity” (“G-S”, p. 165) と悪態をついている。このように Hutton を憎み Doris に対して嫉妬している Janet が今後自らの罰を告白して Hutton を救うという可能性は恐らくないであろう。読者は Janet に女の執念深さをみるのである。また前述したように、この作品は後に映画のシナリオとして脚色されているが、その時のタイトルは “Woman’s Vengeance”⁽⁵⁾ であった。このタイトルは Janet という女性の執念深い恐ろしさを示す一例と言えるであろう。

このように、Huxley は Janet を様々な角度から攻撃しているが、Doris に対しては、どのような扱いをしているのか、また彼女と接する時の Hutton はどう描いているだろうか。Doris は Hutton への手紙の中で “・・・ I was so lonely and miserable・・・ I have nobody in the world but you” (“G-S”, p. 154) と書き Hutton を頼れる男性として見ていることを告白している。ところが、皮肉な事は自殺をしかけた彼女を見つけ助けたのが彼女にとってこの世の中で一番の頼りである Hutton ではなく、たまたま居合わせた医者であったという事である。無責任な男と結婚し男の真意を見抜く事ができず、死刑囚になる運命の男の子供を身ごもってしまった彼女には哀れで愚かな女の姿が漂っている。一方 Hutton にとって Doris は退屈しのぎ程度のものである。例えば Hutton は愛人 Janet に会いに行った時、外に待たせてある車の中にもう一人の愛人 Doris を待たせている。そして、Janet, Doris とたて続けに会った後一人になった Hutton が感じたもの、それは “the prey of an appalling boredom” (“G-S”, p. 145) であった。この事からも Doris との情事がそしてその関係が真剣なものではなく暇つぶし程度である事は明白であろう。さらに Hutton は、妻殺しの容疑をかけられ Doris から疑いの目で見られ何もかもいやになって、彼女の元を去ろうとした時、彼女が自殺をするのではないかという予感にとらわれながらもそのまま彼女を放って出て行っている。恐らく Janet に対する嫌がらせ程度の気持ちで結婚した Doris に対しては、もはやあきあきしていたのであるから彼女が自殺をしても一向に構わないと考えていたのでであろう。ところが皮肉な事に Doris が自殺未遂後自分の妊娠を知り、二度と死を考えるような真似はしないと誓っているのである。Doris と Hutton の関係においては、Hutton は抜け目ない男で Doris が愚かな女であるように見えるが、Doris に子供が出来たという事で Janet との関係において彼女の意のままに動かされていた Hutton⁽⁷⁾ は、さらに二重三重がんじがらめとなり、どこからも逃げる事が出来なくなってしまうのである。

“The Gioconda Smile”において Huxley は、女の執念深さ、したたかさ、抜け目なさ、そして愚かさを Janet という女性を通じて暴露している。妻を殺せば自分が結婚できると考えた事は短絡的で浅はかであるが、綿密な計画をたてた時の彼女は抜け目がない。そして、Emily の死後 Hutton の態度によって彼女はより一層したたかな女へと変わっていく。ところで、このように始終、Janet を皮肉にあふれたタッチで描いている Huxley の Janet に対する唯一の救いとも言える部分がある事は見逃せない。それは Emily 殺害の瞬間である。毒入りのコーヒーを Emily のカップにつぐ時、“Miss Spence was making a delicate clinking among the coffee cups” (“G-S”, p. 149) と、わずかな物音をたてているのである。たとえどんなに用意周到に事を運んだとはいえ、やはり心の動揺からくる手の震えはどうする事もできなかったのであろう。このほんのわずかの救いを与えながらも、やはり作品の結末で Huxley はもう一度強烈な一撃を加えている。それは Janet が事件後、不眠症にかかり睡眠薬を常用する結果になったことである。これはやはり Janet に対する Huxley の痛烈な批難として解釈する方が妥当であり諷刺作家 Huxley の面目躍如であろう。

さて、Huxley の作品には家庭の描写、親と子の交流が少なく、暖い潤いのある穏やかな家庭、家庭の団欒といったものがあまり見られないと言われている⁽⁸⁾。そこで、今まで二つの作品を通して Huxley の女性に対する扱い方を見てきたが最後にここでは、女性、特に母親としての女性に焦点を絞り、Huxley がその代表的諷刺作品 *Point Counter Point* において Elinor を、*Brave New World* において Linda と Lenina をどのような母親または母親候補者として描いているかを検討していくことにする。

Point Counter Point において、Elinor は息子 Phil の病気に際して最も冷酷に扱われている一人である。*Point Counter Point* で Huxley の諷刺の犠牲者になっていない人物は M. Rampion 唯一人であり、他の人たちは多少とも Huxley の諷刺の矢を受けている事は前述した通りである。例えば Elinor の夫 Philip Quarles は精神面と感情面が分裂しているアンバランスな人物として描かれ、John Bidlake, Illidge, Webley, Hilda たちは、愚かさ、迷信深さ、傲慢さ等人間の持っている様々な弱点を暴露され皮肉な調子で描かれている。このように戯画化された登場人物の中でも Elinor とその息子 Phil は特に注目すべき描かれ方をしている。それは Elinor と Webley の密会及び Phil の死に関してである。夫 Philip に不満を抱いている Elinor は昔の男友達 Webley の誘いを受ける決心をしている。その Webley との約束のため出かけていく Elinor に Huxley は、皮肉で残酷な仕打ちを用意している。即ち Phil の脳膜炎による死である。Phil 少年の死の場面は *Point Counter Point* における他の二つの死 (Webley, Cobbett) より

A. Huxley と女性

るかに残酷で最も悲惨であると言える(35章)。苦しみ衰えながら死んでいく幼い少年の姿の描写は、読むに耐え難いと言っても過言ではない。作品を通じて残酷な場面に登場するのが何故このような幼い子供でなければならないのかと思わせるような描き方である。そしてこの時息子の病気を心配し、その子を失って最も悲しみに暮れているのは Elinor だという事は見逃せない。Phil の肉体的苦痛と Elinor の心身両面の悲嘆、苦悩は共に彼女のある行為、即ち Webley との密会の約束と関連があると言える。Webley に会う直前の Phil 急病の報せ、それに続く Phil の死、そしてその死による夫婦間のより深い溝、これらは Elinor の行為を批難するものである。Phil の母親としての義務を怠った、Elinor に対するあまりに悲しく辛い Huxley の批難と考えられる。

Brave New World において、Huxley は Linda, Lenina の二人の女性をそれぞれ John, Bernard の二人の男性と対比させて、母性に欠けた女性として描いている。⁽⁹⁾

John の母親である Linda の彼に対する態度には母親らしさが見うけられない。Linda は元々新世界の人間で John は彼女にとって目障りな存在である。Linda を『お母さん』と呼び彼女を大切に思っている John に対して Linda は、first name で呼ぶように言い実に冷たい態度をとっている。彼女は野蛮人保護地域に住まざるを得なくなった事を憎み、その原因は息子 John にあると考え彼に平手打ちを加えながら口ぎたなくののしっている。“I’m not your mother. I won’t be your mother . . . If it hadn’t been for you, I might have go to the Inspector, I might have got away. But not with a baby. That would been too shameful” (*B-N-W*, pp. 104-105)⁽¹⁰⁾。この引用から Linda にとって John は要するにお荷物である事がわかる。Linda のこの言葉と態度に読者は Linda に母性の欠如をみるのである。

Lenina はまだ母親にはなっていないが、母親となるべき資質に欠けていると言える。野蛮人保護地域で一人の母親が赤ん坊に乳をやる光景に偶然遭遇した時の Bernard と Lenina のそれぞれの様子は実に興味深いものである。Lenina はあたかも “indecent” (*B-N-W*, p. 93) なものを見るように赤面し顔をそむけ “Let’s go away, I don’t like it” (*B-N-W*, p. 93) と Bernard に請願している。一方 Bernard は Lenina とは対照的な反応を示している。

“What a wonderfully intimate relationship . . . what an intensity of feeling it must generate! I often think one may have missed something in not have had a mother. And perhaps, you’ve missed something in not having a mother (*B-N-W*, p. 93).

Bernard はとても感動しているのである。このように Lenina が母と子(親と子)の関

係に対して嫌悪の情ともいうべきものを抱いている事を Huxley は暴露している。

Linda, Lenina における母性欠如の暴露は Huxley の近代社会に対する否定のあらわれである。*Brave New World* に描かれている新世界は高度に発達した超近代社会で、子供は人工的に壇の中で製造されるのが特徴である。そのため親子関係は存在しない。人工的に子供を作るという事が、女性から母性を奪ったと考えられる。Linda, Lenina の態度はその好例である。それに反して John は新世界の体制を良しとせず反抗し続け、Bernard は少なからず疑問を抱いている。Linda, John 親子のそれぞれの態度、母子に接した時の Lenina と Bernard の反応の相違は、子供を人工的に作るという事をそのまま受け入れている女性、さらにはそういった社会に対する Huxley の抗議の一つと考えられる。男性との対比によって母性に欠けた女性を攻撃材料にするという事、言い換えれば女性に厳しい扱いは、間接的ではあるが現代文明社会に対する Huxley の批難であり否定的態度と考えられる。

以上の様々な女性たちの考察は、Huxley の登場人物の描写にいくつかの共通点があることを明らかにしていると考えられる。それは諷刺の槍玉にあげられる率、攻撃の度合が、男性に比べて女性の方が多いという事である。その上、その批難は強烈で女性の扱い方は極めて厳しい容赦のないものである。即ち、Huxley の諷刺の犠牲者は女性に比重がかけられていると言える。前述した M. Rampion, John のような人物は女性の中には見うけられない。同じく諷刺がその特徴の一つである S. Maugham の場合、例えば “A Romantic Young Lady” “Luncheon” の二つの短編において、彼は中年女性のしたたかさ、抜け目なさを描いてはいるが、その筆はユーモアにあふれ彼女たちはどこか憎み切れない女性たちである。Huxley の場合と比べてみると、甘口のさらりとした諷刺が Maugham の特徴といえるのではないだろうか。一方 Huxley は *Crome Yellow* の episode においては三人姉妹とその母親をさらりと軽く攻撃はしているが、その暴露ぶりは実に緻密であり “The Gioconda Smile” では Janet の中に奥深く潜んでいる執念深さを見抜き、その空恐ろしいまでのしたたかさを暴露している。*Point Counter Point* においては、Elinor を実に残酷な状況に置き批難し、*Brave New World* では Linda, Lenina に現代文明批難のための重要な役割を与えながらも極めて辛辣な扱いをしている。描写の細かさ、厳しさ、容赦のなさが自然作品を深刻なものにしていき読者に訴える力が増すのである。その細かい観察と厳しい批難によって Huxley は、彼が攻撃、暴露している様々な事柄について読者に考える機会を与えているのである。諷刺は人に感じさせるのではなく考えさせるという諷刺の基本姿勢⁽¹¹⁾が見事に示されていると言える。

NOTES

- (1) 例えば Keith May は, Rampion とその妻の結婚生活に関する描写(*Point Counter Point*, ch. 9)は, “unironic chapter” であると述べている。Aldous Huxley (London : Paul Elek Books, Ltd., 1972), p. 86. また, 朱牟田夏雄氏は, 「ランピオンを例外にしてあとは全て, 多かれ少なかれ Huxley の揶揄の対象になっている」と同じ意見を述べておられる。『上田勤編ハックスレイ研究』(東京: 英宝社, 1954) p. 165.
- (2) Aldous Huxley, *Crome Yellow and Other Works*(New York : Harper Colophon Books, 1983), p. 87. 以下, *Crome Yellow* からの引用はこのテキストからのものである。以後本文中の () に C-Y の略号と共にページ数のみで示すことにする。
- (3) Aldous Huxley, *Crome Yellow and Other Works* (New York : Harper Colophon Books, 1983), p. 146. 以下, “The Gioconda Smile” からの引用はこのテキストからのものである。以後本文中の () に “G-S” の略号と共にページ数のみを示すことにする。
- (4) Lawrence Brander は, “She [Janet] is a passionate woman, able to conceal her feeling until she has poisoned the wife” と Janet の性格を分析している。Lawrence Brander, *Aldous Huxley : A Critical Study*(London : Rupert Hart-Davis, 1969), p.47.
- (5) Huxley wrote or collaborated on scenarios for *Pride and Prejudice*, *Jane Eyre*, *Madam Curie* and *A Woman's Vengeance*, the last based on “The Gioconda Smile”. Harald H. Watts, Aldous Huxley (Boston : Twayne Publishers, 1969), p. 156.
- (6) Harold. H. Watts は, この映画のタイトルは “sensational” であると述べている。Harold. H. Watts, Aldous Huxley(注 5 参照), p. 156.
- (7) Lawrence Brander, p. 47.
- (8) 成田成寿氏は, ハックスレーの作品において注目される特徴の一つは家庭が彼の題材の対象にならないことである, と述べておられる。成田成寿, A. Huxley, 新英米文学評伝双書 (東京: 研究社, 1971).
- (9) Paul Warren が, Linda, Lenina を指して “They both echo Huxley's essential distrust of women” と分析している事は注目に値する。Paul Warren, *Brave New World and Brave New World Revisited*(Nebraska : Cliff's notes, 1965), p. 47.
- (10) Aldous Huxley, *Brave New World* (Harmondsworth : Penguin Books, 1976), pp. 104--05. 以下, *Brave New World* からの引用はこのテキストからのものである。以後本文中の () に B-N-W の略号と共にページ数のみで示すことにする。
- (11) Leonard Feinberg は, 諷刺の効果は, 読者に考えさせることであると述べている。Introduction to *Satire* (Ames, Iowa : The Iowa State University Press, 1967), p. 259.